

Title	歐洲文明史(松本芳夫譯, 國民圖書株式會社發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.152(464)- 154(466)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

面の研究に志す學者の要目としても、また道數について一般的の概念を得ると欲する人々にとりても、正にその要求に應すべき著作と稱すべきであらう。敢て江湖に薦むる所以である。(橋本増吉)

歐洲文明史 (松本芳夫譯)

近世佛蘭西が生んだ偉大なる史家フランソワ・ピエル・ギヨーム・ギゾーの名著「歐洲文明史」が今回松本芳夫氏によつて邦譯せらるるに至つた。

史家として非凡であつたギゾーは、或は文學者として、或は政治家として、或は雄辯家としていたく傑出し、その高邁周洽なる觀照と博大深刻なる把握の下に生れたる名篇の數々は學界の均しく賞讃措く能はざるところのものである。

本書は彼がソルボンヌ大學に於て得意の雄辯を振つて講じたる文明史である。炬の如き史眼と犀利なる觀察とを以て人間の外的狀態即ち社會の發展を檢討したる一大雄篇であり、全篇は十四講を以て完結してゐる。

第一講に於て著者は講義の題目に歐洲文明史を撰んだ理由を述べる。即ち著者は言ふ「もはや年末餘日もなくなつた。余自身將にのべんとする講演について沈思默考するを得た時間は更に僅かであつた。余は吾々に殘された極めて僅かな時日の間に於て或はまた余に準備するやうに與へられた僅かな時日の中において如何なる題目を限るのが最も良くできるかといふことを求めた。

而して文明の發達と關聯せしめて考察したるヨーロッパ近代史の概觀、即ちヨーロッパ文明の歴史その起原、その進歩、その目的その特徵の概要が、吾々の自由になし得る時間に當てはまるやうに思はれた。從つてこれが余が諸君に講ぜんと決定せる題目である」と。(二頁—三頁) 次に文明を構成する主要なる要素は二つの事實即ち社會的活動の發展と個人的活動の發展、社會の進歩と人類の進歩であると述べてゐる。(十六頁) 而して本書に於て彼は社會的活動發展の考察を眼目としてゐる。第二講に於てはローマ帝國滅亡期に於けるヨーロッパの狀態を考察し、更に古代世界に傳へられたる文明の要素が如何なるものであつたかを制度、信條、思想及び感情の中に研究してゐる。第三講に於ては所謂野蠻時代即ち蠻族侵入の混沌が持續した時代を述べてゐる。

著者は言ふ。「この異様な時代はどれだけの期間に亘つたであらうか。その起原は極めて明かである。それはローマ帝國の滅亡とともに始まつたのである。けれどもその終つたのはいつであつたらうか。この問題に答ふるために、この社會狀態が何に基因するか、この野蠻狀態の原因が何であるかを知らねばならぬ。」

余は主要な二原因を認めることが出来ると思ふ。一は物質的原因で事件の進行につれて外部から發生したものであり、他は道德的原因で内部から即ち人間自身から發生したものである」と。(七十頁) 此の時代に於て人間、財産、及び制度が不安定なる狀態にかれたのは、彼の見解によれば、蠻族侵入の持續といふ物質的原因と蠻人に特有な個人の利己的感情といふ道徳的感情に歸因す

るのである。第四講に於ては封建制度の性質と勢力とを論述してゐる。著者は言ふ。「吾々は封建社會がまづ最初にその最も簡単な根本的要素において、つぎにその全體の形式において觀察した。吾々はこれら二つの見地の下に、文明の發展に及ぼしたるその影響について封建社會の當然なしたこと、及びその結果を檢した。かくて吾々はつきの如き二結論に到達したと思ふ、第一、封建制度は個人の内的發展に對して偉大なる而かも全體より見て有益な影響を與へた。それは人間の精神に、高尚な理想、情操と道徳的要求、及び性格と感情との美しい發展をおこさせた。第二、社會的見地から見ると、封建制度は法律的秩序も又政治的保證をも確立することができなかつた」と。(百八頁—百九頁)第五講第六講に於ては第五世紀から第十二世紀に至るキリスト教會に關し叙述してゐる。著者の見解によれば第五世紀のキリスト教會は獨立して兩者の連鎖となり、あらゆるものに影響を與へたからして、教會の活動を完全に知悉理解するためには三方面から觀察せねばならないのである。先づ第一に教會をそれ自身において見て、それが實状、その内部の組織、その内部に勢力のあつた原理、及び其の性質について評價しなければならない。つぎにそれを現世の主權者、國王、諸侯、及び其の他のものとの關係において最後に人民との關係において觀察しなければならない。而してこの三重の觀察から、教會その原理、その狀態及び教會が必然に及ぼした

る影響について完全なる理解を得たならば歴史に訴へて吾々の所說を確めさうして第五世紀から第十二世紀に至るまでの事實と事件とが前述の三重の研究、即ち教會の狀態、及び教會と世界の主人及び人民との關係の研究によつて導かれたる結果と果して一致するかどうか検討する必要があるのである。(百十五頁—百十六頁)第七講に於ては市邑に關し論述してゐる。第八講に至り、著者は「今や吾々はその研究する範圍の全體にわたつて觀察し、一般的描寫を試みることの必要なる時期に達したのである」(二百頁)と言ひ、叙述の法を變じ、一般的描寫を試みてゐる。而して本講に於ては十字軍に關し詳論してゐる。十字軍の特徵に關し著者は「ヨーロッパ全體が十字軍に參加したのであつて、十字軍は最初のヨーロッパ事件であり、十字軍以前にはヨーロッパが一感情によつて興奮し、一原因によつて活動したことはない」(二百六頁)と言ひ、其の普遍性なることを強調してゐる。然らばヨーロッパをして十字軍に投げしめた原因如何といふに、著者はそれを道德的、社會的の二原因に歸せしめてゐる。(二百九頁)、次に十字軍の第一の主要なる効果如何といふに、著者の見解によれば、人心の解放に向つての大進歩より廣汎なる自由思想に向つての大進歩であつたのである。(二百十三頁)、第九講以下は歴史的舞臺を占有する二大人物、即ち政府と國家とを二大中心としたる近代ヨーロッパ文明史を叙述し、第九講に於いて、著者は「王權がヨーロッパ文明史に於て、すばらしい役目を演じたのは明かであつて、事實を一瞥さへすれば、この事實を信ずることが出来る。吾々は王

權の發達がすくなくとも長い時期に於て、社會そのものの發達と歩を一つにして進んだことを知る。その進歩は相互的であつた」（二百二十五頁）と言ひ、漸くヨーロッパに擡頭しつゝあつた王權に關し論述してゐる。第十講に於ては近代ヨーロッパの種々の社會的要素を調和して、一社會の中に、一中央權力の下に共存共動せしめんとしたる企圖につき説明し、社會が統一するまで充分發達してゐなかつたため、其の企圖が結局失敗したこと述べてゐる。

第十一講に於ては第十五世紀中に於ける人間の精神及び風習の狀態、中央政府組織の傾向及び輿論につき論じ、第十二講は宗教改革、第十三講は人類精神の解放と君主政治との争となつてあらはれたるイギリス革命の眞の性質と政治的意義、第十四講は第十七、八世紀にフランスが如何にヨーロッパに於て優越したる地位を有したかを論述してゐる。

著者に從へば、ヨーロッパ文明史はこれを三大期に概括するこ^とが出来る。即ち第一、彼が端緒、形成の時代とよぶころのもので、社會の種々の要素が混沌狀態を脱して確立し、さうしてそれに生氣を與へた原理とともに、その本來の形においてあらはれたる時代である。而してこの時代はほとんど第十二世紀に及んだ。第二、第二期は努力、試み、探索の時代である。即ち社會階級の種々の要素が言はず相互にちかより、結合し、相互に探り合つた時代であつて、一般的な、規則たらしい、或は耐久的なものを生ぜしむる力がなかつたのである。此の狀態はほんとうを言へば第十六世紀までつづいたのである。第三、これは適切に言つて發展

の時期であつて、ヨーロッパの社會が一定の形體をとり、一定の傾向に従ひ、さうして明瞭精確な目的に向つて速かに普遍的に進歩したる時代である。

この時代は第十六紀に始まり、いまなほその進路を追うてゐるのである。（二百五頁）

之を要するに本書は不朽の名著として許されたるものなるを以て、其の價値についてはこゝに贅言を要しない。本書は社會的見地より第十八世紀までのヨーロッパ文明を知らんと欲する者にとりて得難き良書といふべく、今回松本芳夫氏によつて邦譯せらるに至つたのは、洵に欣快の至りである。譯文流麗にして精緻、わかれらは譯者の勞に對し衷心多大の敬意を拂ふものである。尙卷末に原著者の回想錄抄譯が附してある。その興味深きことは言を俟たない。（宮島貞亮）